

## 献 辞

経営学部教授 稲 別 正 晴

徐龍達先生は、2003年3月末をもって定年で退任されます。定年の定めがあることはやむを得ないことでありますが、誠に惜しまれる次第であります。

先生と私は、たまたま同じ1963年4月就任しましたので文字通り同期の桜であります。この間実に40年という長い歳月が流れたことになります。40年といえば、1959年創立の本学の歴史のほとんどを占める長さであり、この間、多くの激動を共にくぐり抜けてきたことを思えば誠に感慨深いものがあります。

先生とともに就任した時、本学はまだ経済学部だけの単科大学であり、教員、職員数とも少なく、一緒に集まる機会も多く、すべてが知り合いという家族的な雰囲気でありました。その中でも徐先生とは、同期ということで当初から非常に親しくお付き合いをさせて頂きました。当時は、私たちと同時に赴任された新任の先生方が多くおられたということもあり、徐先生を含む気心のあった数名でよく食事をしたものです。集えばつねに、談笑の中に徐先生の駄洒落が飛び交っていました。韓国の焼き肉料理の美味しさや慶州の銘酒、「法酒」の味を知ることができたのも徐先生のご案内のお陰でした。

さて、徐先生は長年にわたって本学の教育、研究、行政のそれぞれにおいて大いに貢献されてきました。また、「定住外国人の差別撤廃」等の人権問題におけるご活躍や、「韓国奨学会」の設立者として在日韓国人学生のために大変力を注いでこられたことでもよく知られています。しかし、ここでは特に本学において多大の貢献とご苦勞をされた2つの事柄について触れておきたいと思います。

一つは学生部次長として、また学部長として大学紛争のまっただ中での苦勞です。教職員・学生が家族的雰囲気の中で一体となり、希望を持って新しい大学作りに励んでいた状況を一変させたのが大学紛争でありました。大学立法反対運動、沖縄返還運動や安保闘争などを背景として全国的に吹き荒れた大学紛争は、本学でも1969年には昭和町学舎と登美丘学舎の相次ぐ封鎖という事態を招き、大衆団交に明け暮れるという状況でありました。この時、徐先生は学生部次長として当時の玉井龍象学生部長を補佐して直接この事態に対峙するという立場にあり、その苦勞は並大抵ではありませんでした。徐先生を始め、学生達と直接折衝されていた先生達は心身共に大変疲勞されており、多分誰が倒れてもおかしくない状態であったと推測されます。

それでも大学紛争から立ち直り、1973年4月には経営学部が新設されましたが、今度は学費値上げ反対闘争で、またもいわゆる大衆団交に迫られる事態となりました。そしてこのことは徐先生にさらに大きな重荷を背負わせることになりました。

初代学部長であった廣瀬雄一先生が、この過程で1974年10月に辞任されたため、経営学部では次期学部長選出が喫緊の課題となりました。なにしろ大変な状況でしたから自ら、進んでこの重責を担おうとするものがないのは当然でしたが、学部の大半の考えは、この難局を乗り切れるのは徐先生しかないということでした。徐先生は当時、図書館長という重要な職についておられ、また大学紛争時の苦勞もあり、研究に専念したいと考えられていた時でしたから、この要請に大変苦悩されたことは私の記憶にも残っています。結局、半ば強引に選出されるという結果になりましたが、このとき徐先生はまだ41歳、いくら非常時とはいえ、この年齢で学部長に選出されたということは今から考えても異例だったといえるでしょう。大衆団交や教授会への傍聴要求、あるいは強引な学生集団に迫われて学外での教授会開催（当時の学生集団の言葉では「逃亡教授会」）など、当時の学部長の先生方は本当に大変な苦勞をされたのであり、今から考えてもその苦勞には頭が下がります。勿論、徐先生は学部長の一員として、学部メンバーの期待に答えてこ

の重責を立派に果たされました。このような学内行政での顕著な働きの流れの中で、徐先生は通算20年にも及ぶ長い期間にわたって、大学評議員や法人評議員として活躍されました。

徐先生のもう一つ大きな働きは、韓国啓明大学校との国際交流です。建学精神に基づく国際交流は、いまや本学の研究と教育の重要な柱の一つですが、中でも韓国啓明大学校との交流は20年以上にわたり、しかもその内容は学術研究交流、教員の相互派遣、留学生の相互派遣、さらには職員の相互派遣と極めて多岐にわたり、質量とも内外に誇れるものとなっています。しかしここまで発展することになった背景には、徐先生の粘り強い大きな働きがあったことを忘れることはできません。

本学と啓明大学校との公式の交流は、徐先生が引率者として実施された1980年8月の「第1回桃山学院大学韓国歴史セミナー」に始まります。しかし、徐先生はすでに1968年3月に先生のゼミ生を引き連れて訪韓されており、それ以後もいろんな形で交流の発展と深化に努力され、それが最終的には啓明大学校との正式の交流として実を結び今日に至っているのです。

徐先生が両大学の交流に努力された時期は、一般的にはまだ英語圏との交流が重視される状況でありましたから、すべての人達が積極的に支持したとはいえませんでしたし、またここまで発展すると予想した人はそれ程多くはなかったと思われます。

啓明大学校との交流を重視し、その発展を高く評価するのは、わが国のアジアにおけるあり方と大いに関わっているからです。アジアの国々との交流は、ようやく最近になって単なる経済的な交流から文化的な交流へと広がり始めたようではありますが、私は常日頃から少なくとも教育・研究の分野においては、私たちがアジアにおける交流のモデルを作るぐらいの意気込みで取り組むべきだと思っています。この点で啓明大学校との交流は極めて重要であります。

勿論、もっとも進んでいると思われる啓明大学校との交流も決して十分とはいえませんが、今後いつその発展の可能性を持っていることは間違いあ

りません。この意味で啓明大学校との交流の扉を開き、その後の発展に貢献された徐先生の功績は大きく称えられるべきものであります。なお、徐先生が啓明大学校への日本図書の寄贈というボランティア活動を始められ、多くの方の協力により、すでに1万冊を越す図書が寄贈文庫として啓明大学校で活用されていることも忘れてはならないことであります。

徐先生は退任後もこれまで同様多くの人々の要望に応じて広くご活躍されることと思いますが、くれぐれもご健康に留意されながら、また駄洒落で人々を笑いの渦に巻き込みながら、心豊かにいつまでもお元気で過ごされますようお祈り申し上げます。